2つの牛石（うしいし）

何げなく通る道ばたに、ひっそりと立つ古びた石の道標や石仏、石塔があります。

見慣れた風景の一部として普段は気にも留めず、見過ごすことの多いその石たちですが、道標は方向や行き先を示し、石仏や石塔は祈りの場であるとともに、道を行く人を見守る存在でもありました。そして、その土地に生きた人びとの祈りや信仰、そして伝説や伝承とともに暮らしの記憶などが刻まれています。

そういった石たちの中から、今回、「牛」にまつわる2つの石、「牛石」を紹介します。

一つは、三美（みよし）の県道脇にある「牛石（供養塔）」です。それには次のような民話が残っています。

－昔の三美村に長者がいました。その長者は庭つくりが趣味でした。毎日毎日、険しい山や遠い川など道もないようなところを、木や石を牛に運ばせていました。

ある朝、その家で働く使用人が、「牛めが弱って死にかかっています。」と、長者のところへ慌てて駆け込んできました。牛のことなど一度も考えてみたこともない長者ですが、ボロボロの牛小屋に行って牛に近づいてみると、痩せこけた牛は、もう死んでいました。長者は、今まで牛のことなど一度も考えてなかったことを深く反省し、牛を手厚く葬り、そこに供養塔を建てました。－

この牛石は道標で、宝暦14年（1764）に建てられたもので、表に「右　しず村峠（むらまつ）道　三美村當國　三十二番札処、左　太田いわき道　慈眼寺」、左側面に「佐竹へ四り　宝暦十四申二月吉日　藤左衛門立之　石沢へ一り半」、裏に「牛銀之牛石　人足十四人　福島村ニ成申候」の銘文と、牛の線刻が刻まれています。



▲三美の牛石

もう一つは、若林地区の引田にある「弘法の牛石」とよばれる民話が残る牛石です。

－昔、引田村（現在の若林の一部）の若者が正月用の薪を牛の荷鞍に積んで、難所といわれる広見ヶ入の峠（若林と上村田の境）に来たとき、牛が足を滑らせ谷底へ転げ落ちてしまいました。

若者は谷底まで行き、牛を助けようとしましたが、牛は、既に息絶え絶えでした。そこへお坊様が通りかかり、「この牛は神となって、この難所の峠を通る牛や馬などを明日から守ってくれるだろう。」と言って呪文を唱え、持っていた杖（錫杖（しゃくじょう））を牛にあてると、その牛は見る間に石になってしまいました。そして、その後この峠では事故がなくなり、そのお坊様は弘法様といわれ、その石を「弘法の牛石」と言うようになりました。－

このように、2つの牛石にはそれぞれ伝説があります。牛は、農作業を支える相棒であり、生活を共にする身近な存在でした。また、各地の民話や信仰の中にも度々登場するなど、人と牛の結びつきは仕事だけでなく、文化や心の面にも広がっていたことがうかがえます。

せわしない日々だからこそ、時には、土地の記憶や伝承を今に伝える路傍の石（石仏・石塔など）に、目を留めてみてはいかがでしょう。そこには、新たな発見があるかもしれません。



【参考図書】

・大宮町石仏・石塔調査報告書－おおみやの野仏とその祈り－
・大宮町の民話

（歴史民俗資料館　宇留野美雪）